

完了評価調書

整理番号	12	研究課題名	腸管出血性大腸菌の疫学調査
研究目的		<p>茨城県の腸管出血性大腸菌症の届け出は、年々増加している。1996年7名、'97年12名、'98年34名、'99年53名、'00年32名、'01年48名に達し一向に減少するようすはなく、食品等を介した感染が広域におよんでいる現状である。</p> <p>そこで、茨城県で分離された菌の形質的・耐性菌獲得状況などを検討し、その特徴を把握し公衆衛生に寄与する。</p>	
研究の成果		<p>1996年から2001年に茨城県で分離された腸管出血性大腸菌株170株について血清型・毒素型・生化学性状・PFGE・薬剤耐性試験を行った。菌の血清型は、O157が136株、O26が33株、O111が1株で毒素はO157株は6割が1・2型両方産生、O26株はほとんど1型のみ産生、O111株は両方産生していた。薬剤耐性は、全体の20%の株が耐性を獲得していたが、1996年から6年間に著しい獲得株の増加は見られなかった。PFGEの泳動パターンは、型から型、型それ以外のND、それぞれの型のサブタイプなど型は多様であった。血清型・毒素型・生化学性状・PFGE型・薬剤耐性において有意な関連性は見られなかったが、疫学指標であるPFGEによるDNA型が多岐にわたっている事から、PFGEの有用性と茨城県における汚染の多様化の実態が示唆された。</p>	
成果の普及・活用方法		<p>感染症研究所を中心としてPFGEによる泳動パターンを比較解析できるシステムが進行中である。茨城県においても疫学解析の結果をdiffuse outbreakを視野に入れて情報提供する。</p>	
残された課題		<p>腸管出血性大腸菌は、食品等を介した全国規模の発生が見られ、広域な情報収集に基づいた疫学解析を必要とする。有意義な疫学調査の有り方と菌株収集および有効な疫学解析法。</p>	